

令和5（2023）年度 みよし市中学生平和学習広島派遣団 学習成果報告書



令和5（2023）年8月2日（水）・8月3日（木）

目次

—— 第1部 はじめに ——

市長あいさつ	P 1
みよし市非核平和都市宣言	P 2
事業概要	P 3

—— 第2部 事業報告 ——

結団式及び事前説明会	P 4
派遣団員名簿	P 6
写真による行動の記録	P 7 ~ 14
参加者研修報告	P 15 ~ 31

第1部 はじめに

市長あいさつ

みよし市は、平成22（2010）年の市制施行を機に、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、戦争の惨禍を二度と繰り返すことのない社会と人類の恒久平和の実現を目指すため、「みよし市平和都市宣言」を行いました。そして、世界でのロシアによるウクライナへの軍事侵攻や核兵器使用の威嚇が行われている状況を憂い、令和4（2022）年9月に、市民の皆様に核兵器のない世界についてより深く考えていただき、核兵器のない世界に一步でも近づくことができるよう、より強い決意で「みよし市非核平和都市宣言」を行いました。

戦後78年が経過し、戦争を知らない世代が増えている今、私たちが戦争や原爆の体験を次の世代へ語り継ぎ、平和の大切さをどのように伝えていくのか、考えていくかがこの平和を守り、後世へ紡いでいくためにとても重要なことであると考えます。

市内の中学生の皆様を広島に派遣する「みよし市中学生平和学習広島派遣事業」は、戦争の記憶を風化させないための平和に対する取組の一つとして、平成28（2016）年度から開始しました。本年度は、参加人数を昨年度までの各中学校3名ずつの計12名から、少しでも多くの参加希望者に参加いただきたいとの思いで、各中学校4名ずつの計16名に増員し、実施いたしました。派遣事業は、生徒たちが被爆地である広島に立ち、原爆の被害に関する資料を自分の目で見、被爆者自身の体験を直接聞くことで、平和の大切さや命の尊さ、家族の絆を考えてもらう大変貴重な機会となっています。

この報告書には、市内4中学校の代表として派遣された16名の生徒たちが、恒久平和の実現に向け、次代を担う世代として、これからの将来に向けて取り組んでいかなくてはならないと感じた「平和へのメッセージ」が綴られています。そして、派遣で生徒たちが感じた思いを、より多くの皆様に共有していただくために、この報告書を作成しました。報告書を読んでいただいた皆様の、いま一度平和について考えていただくきっかけになれば幸いです。

結びに、この派遣事業にご協力をいただいた学校関係者をはじめ、多くの皆様にお礼を申し上げ、ごあいさついたします。

令和5（2023）年12月

みよし市長 小 山 祐

みよし市非核平和都市宣言

核兵器のない世界と恒久平和は、私たち人類共通の願いです。

わが国は核兵器による攻撃を受けた唯一の国家であり、私たちは、非核三原則を掲げ、核兵器廃絶を全世界に訴え続けていかなければなりません。核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さについて、考え、語り、戦争で犠牲になった方々の想いと共に後世へ引き継いでいくことは私たちの使命です。

戦争から年月が経過し、核兵器と戦争を現実として体験された方が年々減る中、核兵器と戦争の記憶を風化させ、惨禍を二度と繰り返すことがあってはなりません。

みよし市は、日本国憲法に基づいて、世界平和を願うすべての国の人々と手を携え、強い決意で、核兵器のない世界と恒久平和を実現するため「非核平和都市」を宣言します。

令和4（2022）年9月29日

愛知県みよし市

事業概要

1 事業名

令和5（2023）年度みよし市中学生平和学習広島派遣事業

2 目的

- (1) 核兵器のない世界と人類の恒久平和の実現を目指す「非核平和都市」であることを宣言した本市として、「平和に関する事業」に取り組む。
- (2) 中学生が、実際に広島を訪問し、原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学や被爆者による講話を通して、戦争の悲惨さ、平和の意義について考えてもらう機会を提供し、命の大切さや家族との絆等についての認識を高める。

3 内容

- ・原爆ドーム及び広島平和記念資料館の見学
- ・被爆者による被爆体験講話の受講

4 派遣期間

令和5（2023）年8月2日(水)から令和5（2023）年8月3日(木)まで〔1泊2日〕

5 派遣人員

- (1) 団長＝みよし市教育長
- (2) 生徒＝市内中学生 16名（各中学校4名）
- (3) 引率＝教育委員会学校教育課主幹1名、総務課副主幹1名
計19名

第2部 事業報告

結団式及び事前説明会

《日にち》 令和5（2023）年7月15日（土）

《場 所》 市役所3階研修室

1 結団式

- (1) 認定書交付
- (2) あいさつ
- (3) 団長あいさつ及び団員紹介
ア 団長あいさつ
イ 自己紹介
- (4) 写真撮影

派遣団員に
認定します！



広島派遣に応募した理由、
派遣で学びたいことを自己
紹介とともに発表しました。



2 事前説明会

(1) 事業説明

ア 派遣事業全般について

イ 研修報告について

(2) 質疑応答



3 レクリエーション（生まれ月日順整列ゲーム）



団員同士の親交
を深めました！

言葉を使わず
身振り手振りで
コミュニケーション



派遣団員名簿

○ 生徒合計16名

学校名	団員名	学年
三好中		2
		3
		3
		3
北 中		1
		1
		2
		3
南 中		1
		2
		2
		3
三好丘中		1
		2
		2
		3

○ 団長

区 分	氏 名
教育長	増岡 潤一郎

○ 引率者2名

区 分	氏 名
学校教育課主幹	長谷川 洋子
総務課副主幹	林 航平

○ 応募者数

学校名	合 計
三好中	7
北 中	9
南 中	13
三好丘中	14
合 計	43

応募者総数／派遣者数＝43／16（2.69倍）

写真による行動の記録

＜出発式＞

広島に向けて出発する前に、派遣中は自分が学びたいことをしっかり考えて行動し有意義な派遣にすること、派遣団としてみよし市の中学生の代表である自覚をもって行動することを確認しました。また、熱中症や感染症への対策など、健康面に関する注意も行いました。



派遣団団長のあいさつ

決意表明！



さあ、広島へ！



<宮島>

広島に到着後、派遣団員の親睦を深めるため、フェリーで宮島に渡り、厳島神社を参拝しました。案内の方の説明を聞き、文化遺産に触れることで、歴史・文化を大切にする気持ちを高めました。宮島のシンボルである大鳥居は改修を終え、壮大な装いを見せてくれました。その光景は、歴史・文化を守る大切さを感じさせてくれました。また、厳島神社の天神社には、学問の神様である菅原道真が祀られているため、冬に受験を控えた3年生を中心に、手を合わせました。



<学習・宿>

宿では、自分はどうして広島派遣に応募したのか、世界の恒久平和のために自分には何ができるのかを考え、2日目の平和記念資料館や被爆体験講話に備えました。

また、食事の号令の際などには、各自が感じたこと、広島派遣への思いなどを自分の言葉で団員みんなに伝えました。人により感じることは様々で、自分と違う考えに触れ、新たな視点で平和について考えることができました。



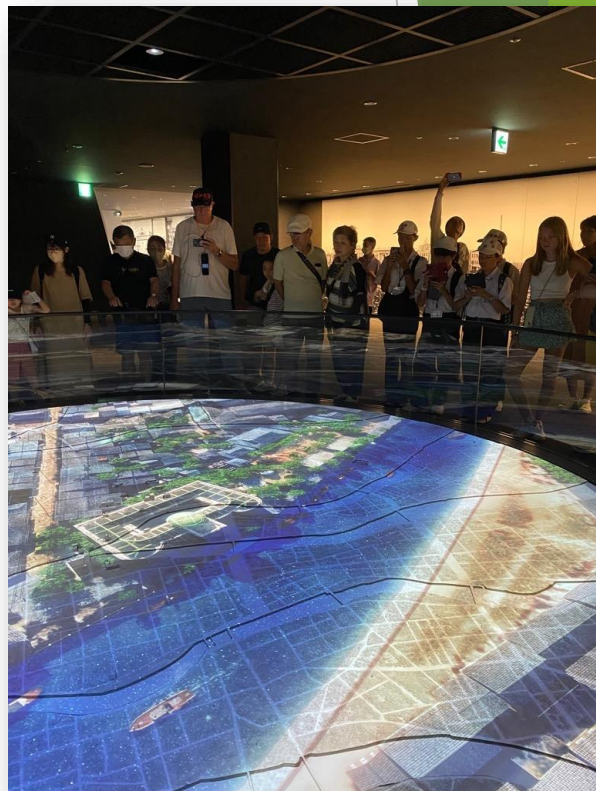
＜原爆ドーム・平和記念公園＞

ガイドボランティアの方に平和記念公園内の慰霊碑について解説をしてもらい、原爆が落とされた背景や当時の様子などの詳しい話を聞くことで理解を深めました。「原爆ドーム」や『折り鶴と「原爆の子の像」』などに、戦争の悲惨さ、原爆の被害の大きさ、その後の広島の復興について考えさせられました。



<広島平和記念資料館>

平和記念公園の散策後、広島平和記念資料館を見学しました。原爆の被害を受けた人々の写真や遺品などの展示物や当時の記録を目にすることで、原爆がもたらす被害の大きさや、原爆は、戦争後もずっと人々を苦しめるものであることを感じ、家族や友人と過ごすことができる現在の平和がいかに大切なものか考えることができました。



<被爆体験講話>

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で、3歳の時、爆心地から1.6km離れた自宅で、母と遊んでいた庭から家の中に入ったときに被爆された清水弘士さんから、当時の状況を示す資料とともにお話を伺いました。清水さん自身やご家族、ご友人に起きたこと、広島被害の状況、終戦後も残る健康面等への不安など、様々なお話を聞き、平和の大切さ、戦争と核兵器の怖さについて、より深く考える機会となりました。



清水さん自身の
経験や広島で起きた
戦争の現実をお話し
いただきました。

被爆者の講話は
平和の大切さを
改めて考え
させられました。



<帰着式>

2日間の広島派遣で肌で感じたこと、今ある平和は当たり前のもではなく、多くの戦争の犠牲者があり、復興の努力の上に今の平和な生活があること、今後も平和を続けていくために自分たちにできることを代表生徒2名が報告しました。今回の派遣で知った戦争や原爆のこと、直接聞くことができた被爆者の方の思い、この派遣を通して自身で感じた平和の大切さを、派遣団員自らが家族や友人、周りの人々に伝えることで、今ある「平和」をつなげていくことを確認しました。

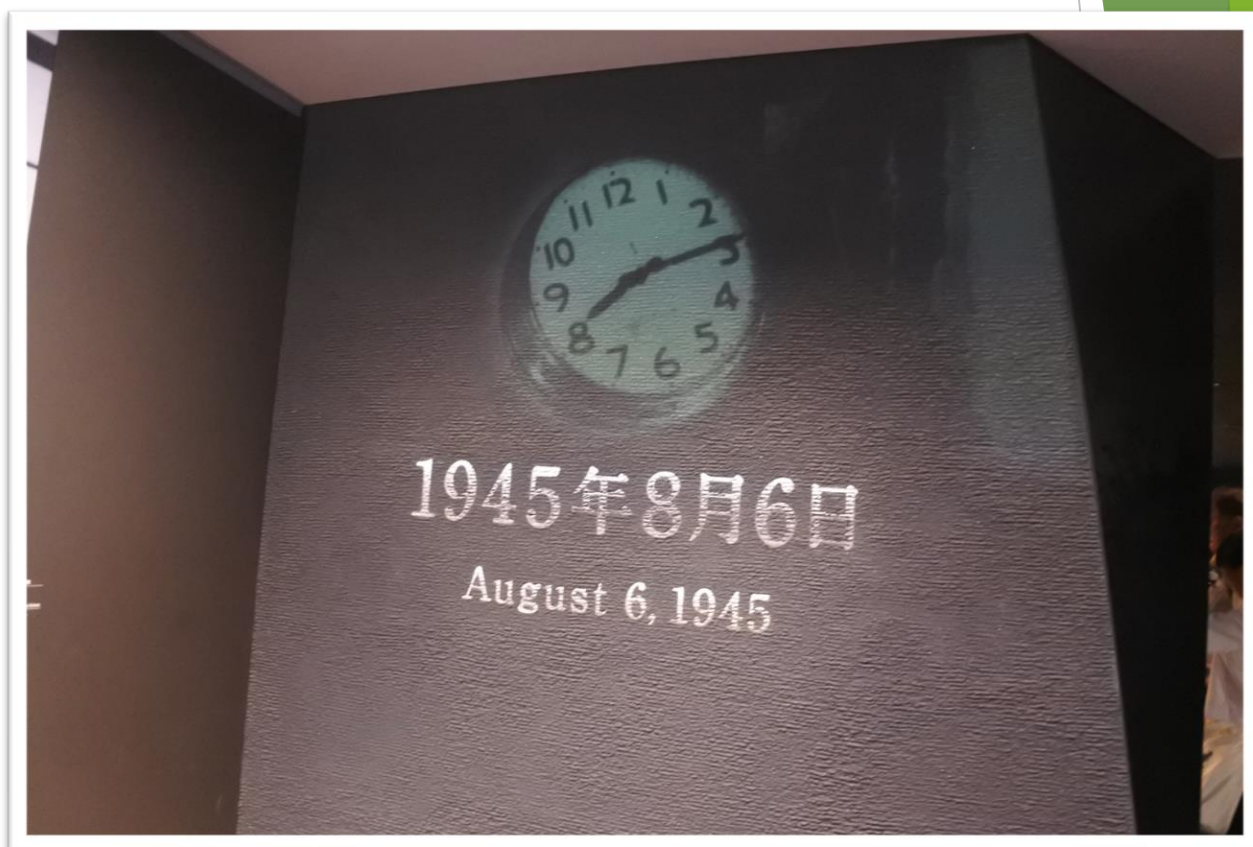


<平和を紡ぐつどい>

令和5（2023）年9月9日（土）に初めて開催された「平和を紡ぐつどい」に派遣団として参加し、献花、派遣団全員での「みよし市非核平和都市宣言」の読み上げ、派遣団員2名の「中学生平和学習広島派遣報告」を行いました。その後、広島市からお招きした被爆体験伝承者の講話を傾聴しました。



派遣団員研修報告



広島派遣団に参加して

三好中学校 2年

戦争はしてはいけない。核兵器を持つことも使うこともいけない。誰もが頭ではわかっていることです。僕は広島派遣団に参加して、広島原爆ドーム、広島平和記念館・資料館、実際被爆された方の壮絶な体験話を聞いてきました。

8月6日、広島に原子爆弾が投下されました。原爆は爆心地の上空600mで爆発しました。一瞬にして広島の人々と街が破壊されました。

資料館には、飛び出た目玉を手で持つ人、皮膚が焼けてまる焦げの人、顔が腫れて誰だかわからない人、ゾンビのような人の絵があり、見ているのが苦しくなりました。戦争は残酷で恐ろしく、地獄の世界です。

原爆で亡くなった人も生き残った人も本当に苦しく、辛い日々を過ごしたそうです。被爆者の平均年齢は85歳で、僕が話を聞いた方は81歳でした。3歳の時に被爆されました。もう2度と同じことを繰り返さないために、辛い体験を話してくださいました。

お父さんの出勤を見送って、飼っていたうさぎの世話を終え、家に入った時に、目が焼けるような閃光と爆音が鳴り、危険を察知したお母さんが、すぐにお腹の下に隠してくれたおかげで、無傷だったそうです。しかし、小学生になった頃、お腹の痛さや鼻血が出たり、後遺症に悩まされました。若い時の被爆は、よりリスクが高く、白血病で亡くなる人も大勢いたそうです。10年近く経ってから、白血病になった人で佐々木禎子さんがいます。折り鶴を千羽折ったら、病気が治ると信じて、1ヶ月で千羽折ったけど、12歳で亡くなりました。戦争が終わっても、「体の中で戦争は終わらない。」

罪のない子供が犠牲になって、未来が絶たれてしまいました。お父さんを失い、長い間苦しく辛い思いをしたのに、僕が話を聞いた方は「アメリカを憎んではいけない、憎しみの心がまた同じことを繰り返してしまう。」とおっしゃっていました。なかなかこのようには思えないと思います。家族、友人を失ってひどい後遺症で生きていくのも辛かったのに「この戦争は日本も悪かったから、アメリカだけが悪いわけではない。」とおっしゃっていました。

広島には、平和の鐘があります。平和の鐘はその名の通り、平和を祈る鐘です。この鐘は、どんな宗教の人でも鳴らせるように、鐘の周りがつるつるになっているそうです。仏教の人でもキリスト教の人でも他の宗教の人でも、誰もが遠慮なく平和を祈れるようになっているそうです。もう一つ鐘の表面には、世界地図が彫られています。この世界地図には国境が描かれていません。国境がなければ争いが起きない。世界は一つという意味が込められているそうです。広島の方の平和を祈る気持ちを感じました。

そして、平和の灯を見てきました。昭和39年8月1日以来、ずっと燃え続けていて、核兵器が世界からなくなるまで消えないそうです。僕は8月6日、8時15分、平和の灯の火が消えることを祈り、黙祷をしました。

今年はG7サミットが広島で行われました。各国の首相が、広島原爆を見て、僕と同じように「戦争はいけない、核兵器はいけない」と感じたと思います。平和な世界になるために、一人一人が戦争について知ろうとする努力をする必要があると思います。

今後私たちはどうするべきか

三好中学校 3年

私が広島派遣団に参加した理由は、戦争によって様々な被害を受けたが、その中でも「原爆」ではどれほどの被害を受けたのかを知りたかったからです。

私が最初予想していたのは、街の風景、人間への被害でした。でも本当に原爆が残っていたものは、すべてなくなってしまった街、怒り、悲しみなどの感情、人間の外傷、心の傷でした。やはり、争いはマイナスなものしかおいていかないなと思いました。

広島派遣団では、原爆ドーム・平和記念公園見学、平和記念資料館の見学、被爆体験講話を受講しました。

原爆ドーム・平和記念公園見学では、ガイドの方に公園内を案内してもらいました。案内をしてもらっていると、目を引くものがありました。それは、「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」でした。それを見て私は、原爆で犠牲になった人は日本人以外もいたから日本国だけの問題ではないと思いました。この後に行った平和記念資料館でもロシア人や朝鮮人、アメリカ人も原爆の被害にあったことのわかる資料が展示してありました。

次に原爆ドームの説明を聞きました。なんとガイドさんから聞いた話ではまだ放射線がドーム内に残っていると聞きました。もう78年も前なのにまだ面影が残っているとすると恐怖を感じました。

次に平和記念資料館に行きました。資料館に入ってすぐふと思いました。外国の人が多いなど。私は最初てっきり日本人が多いのかなと思っていましたが外国の人も同じくらい多かったです。資料館では「8月6日の惨状」、「放射線による被害」、「魂の叫び」「生きる」というブースを見学してきました。

まず「8月6日の惨状」では、原爆のおちた町につづき火傷をおった人々の写真が展示されていました。これだけでも痛々しいのですがすこし進んでいくと「放射線による被害」のエリアに入りました。まず目に入ってきたものはたくさんの子供の服でした。なかには幼稚園児の服らしきものもありました。こんなにも小さい子供も原爆の被害にあったのだと思うと心が痛みました。さらに進んでいくとなんとも痛々しい火傷のあとの写真やほとんど破れてしまっている衣類、被害者の方々の持ち物が展示されていました。次には被爆後に生き延びた人々の展示エリアでした。家族や知人を失った悲しさや心身に残る傷をのりこえていく人々の資料がありました。この資料館を通して、8月6日になにがあったかを理解しうけとめていかないといけないと思いました。

次に被爆体験講話を受講しました。講師の方は3歳で被爆したそうです。話を聞いていると、日本に原爆がおちた理由、なぜ広島だったのか、後遺症、その後の生活についてくわしく知ることができました。講師の方の話を聞いて資料だけではわからない当時の状況やその時代を生きていた人の感覚がよくわかりました。

私は広島派遣を通して、唯一の被爆国である日本に住む私たちは今後どう生活していけばよいのか考えなければならないと思いました。そのために日本にあったことを学び、受けとめていこうと思います。

「たった一つの原爆で、こんなに・・・。」

広島に原爆が投下され今年で78回目の夏を迎えました。被爆者の高齢化が進み、「被爆体験の継承」が問題になっているという事をG7広島サミットのニュースで知り、被爆者から体験した話を直接聞くことができるのはとても貴重な経験になると思いみよし市中学生平和学習広島派遣団に応募しました。結団式では、「戦争の悲惨さをしっかりと学び、感じた事をたくさんの人に繋いでいけるようになりたいです。」と意気込みを伝え、事前学習をして出発に臨みました。

今回の広島派遣では、原爆ドームや平和記念公園、広島平和記念資料館の見学、そして実際に被爆をされた方のお話を聞きました。

平和記念公園で特に印象に残った場所は、「原爆の子の像」と「平和の灯」です。

「原爆の子の像」は、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、原爆の犠牲になった全ての子供達の霊を慰めようと、募金などの寄付で建てられました。禎子さんは千羽鶴を折れば病気が治ると信じ折り続けました。禎子さんの話は多くの人に伝わり、今でもこの像に平和を願い世界中からたくさんの千羽鶴が贈られてくるそうです。僕も、罪のない子供たちが犠牲になるような戦争や原爆は絶対してはならないことだと思いました。

「平和の灯」は、原爆投下の時に水を求めていた犠牲者を慰めるために作られました。1964年8月1日に点火されて以来、今もずっと燃え続けているこの灯は「消えない灯、消す灯」という言葉でも呼ばれています。核兵器がゼロになったらこの灯を消すという、核兵器廃絶への強い願いが込められているのだそうです。これからは僕たちの世代が核兵器廃絶という想いを受け継ぎ、新しい世代の人に繋いでいかなければいけないことだと強く思いました。

広島平和記念資料館では想像を絶する展示がたくさんありました。海外から来た人達も大勢いて、一つ一つの展示が見る人々を驚かせていました。「助けて・・・」と語りかけてくる展示に皆黙り込んでいました。戦争の怖さ、原爆の怖さを僕たちに無言で教えてくれました。僕はこの資料館を見学して、改めて戦争や原爆というものがどれだけ悲惨なものなのかがよく分かりました。そして、こんな悲劇は、もう二度と繰り返してはいけなし、一人一人の命の尊さや平和の大切さを、世界中の人にもっと知って欲しいと強く思いました。

今の広島は、資料館にある原爆投下当時の写真とは見違えるほど綺麗な街でした。広島の人々が協力し、立て直していったこの街は、たくさんの人の想いでできた素晴らしい街になっていると感じました。

実際に被爆された81歳の男性の方の体験を聞いた時には、心にグッとくる言葉がたくさんありました。「一瞬にして焼け落ちた」「鉄を溶かす熱さ」どれも衝撃の言葉でした。このような悲惨で苦しい出来事はもう二度と繰り返さないでくれ、という必死な願いが伝わりました。核兵器を使っても良いことは何もない。ただ、何も罪のない人を苦しめる残虐なものでしかありません。実際に被爆された方のお話を聞き、戦争や核兵器の悲惨さと共に、当たり前のように今ある命や平和について感謝しながら考えるようになりました。

この誰も得をしない苦しく悲惨な出来事はもう二度と繰り返してはいけなし。戦争や核兵器の悲惨さ、そして命の尊さを、これから次の世代へと伝えていくことが僕たちに任された使命です。願いを受け継いだ僕たちは、核兵器のない、戦争のない、誰もが安心して生きていける、そんな平和な世界を紡いでいきます。



1945年、8月6日、午前8時15分。今から78年前の広島に広がった暗い空。その時、広島上空で何が起きていたのか、広島県民の人々はどのような様子でいたのか、実際に起きたことを詳しく知り、平和についての思いを強くするため、私は広島派遣団の一員として現地に足を運んできました。

今回の派遣のメインである「平和学習」、私たちは平和記念公園を散策し、次いで平和記念資料館へ行き、学習の締めくくりには実際に被爆を体験した方の貴重なお話を聴かせていただきました。

まず、平和記念公園では広島原爆の象徴ともいえる、原爆ドームを初めて見る事ができました。ボロボロになった丸い屋根や、地べたに崩れ落ちた建物のがれき達。とてつもなく痛々しいもので、それだけでも当時の原爆がどれだけ影響が大きかったのか、考えずとも分かるものでした。原爆ドーム以外にも、原爆の子の像、たくさんの折り鶴が入ったアートなどを見てきました。広島県民の方々が、原爆を忘れまいと常に記憶に残せるよう、そのようなものが作られたのかなと感じました。また、公園はもちろん、広島街の街並みがとってもきれいで、たくさんの人々が復興に向けて動いていたのだなあと思いました。

平和記念資料館では、事前資料で見たり、インターネットで調べて出てきた情報よりも最もリアルに原爆が起きた時の情景、悲惨さが古い写真や資料からひしひしと伝わってきました。私たちと同じ学生の焼け焦げてしまった制服、灰によって真っ黒になったお弁当箱、原爆の際に負ったとてもとても大きな傷、焼け野原というよりもはや廃墟になってしまった街の景色。当時の人々の傷の状況を書き留めた実際の記録や生き残った家族や恩人への手紙、身に付けていただろう御守など。それらはどれも胸が痛む現実でした。自然と涙がでてきてしまうような、「悲惨」という言葉では表すことのできない恐ろしさ、まともに動くこともできず、家族がそばにいないなど人々がわたし達の想像を遥かに超える、つらく苦しい思いをしてきたことが伝わり、当時自分が生きていなかったとしても申し訳なさが増えました。そのような思いを抱き、被爆者の方のお話を聴いてきました。その方が当時3歳で、母親と庭から家の中に入ったときに被爆したそうです。原爆が起きる前、何度も何度も危険を知らせる警報が鳴り、恐怖の中活動しており、その中で原爆が落とされたそうです。父親と離れ、母親と2人だけで避難しており、「母も不安だっただろうに」とおっしゃっていました。多くの方が必死になって火の海から逃れようとしていたそうです。その方の父親は亡くなってしまったそうですが、母親と生き残り、両親への感謝の気持ちを露わにしていました。

原爆前の様子、当日の出来事などの中から特に驚かされたのが原爆後のことです。放射線による後遺症が残ってしまった人々、大きなやけどを負った人々などが溢れていたそうです。長い年月が経った今でも原爆経験による影響で病気に苦しんでいる方も多いそうです。また、原爆直後には政府にも放ったらかしにされ、支援金もほぼ0に近い中救助にあたっていたそうです。お話を通して、まだ幼かったとはいえ、鮮明に情景を覚えていらっしゃる、それほど強烈な出来事だったと改めて実感しました。

まだまだ伝え切れないことが山ほどありますが、私はこの平和学習を通して核兵器の脅威や広島の方々の平和への強い思いを感じ、学びました。戦争は二度と起こしてはいけません。今現在はいくつかの国が未だに核兵器を所持しています。核兵器を0にできたならどれほど良いでしょう。平和の実現、まだまだほど遠いです。原爆を知り、多くの人に伝えましょう。平和な世界だと胸を張り言えるよう。

広島派遣を終えて

北中学校 1年

僕は、小学校の社会科の授業で広島に原爆が投下されたことを学びましたが、僕にとって原爆の投下は遠い昔の話で、教科書の中の話でしかありませんでした。そのため、広島派遣に行くまで広島に原爆が投下されたことに対して、あまり深く考えることはありませんでした。しかしこの広島派遣に行って、広島に原爆が投下されたことに対して考えるようになりました。今までの考えは、原爆が広島に投下され、広島が焼け野原になりたくなさんの人が苦しんでいたということしか知らなかったため僕には関係のないことだと思っていました。今は、広島に原爆が投下されてたくなさんの人が苦しんだだけでなく、放射線などによる後遺症で今も苦しんでいる人がいることを知り、僕にもなにかできることはないかと考えるようになりました。

僕は、この派遣で被爆された方のお話を聞きました。その人のお話の中にはたくさんの悲慘なことがありました。僕はその中でも印象に残ったことが3つあります。

1つ目は、川が死体で埋め尽くされたことです。水を求めに川に入った人がどんどん死んでしまったそうです。その理由がおそらく気道熱傷によるものだと言われています。気道熱傷とは、高温の煙、有毒ガスなどを吸ったことにより喉や肺が腫れたりする症状だそうです。このような症状により水を飲むときに強烈な喉の渇きと痛みによって、飲みこめなくなってしまう窒息してしまったと言われています。この話を聞いて、物語に出てくる地獄の世界のようだと思いました。

2つ目は、被爆者が10年間ほったらかしにされたことです。原爆を投下したアメリカは、広島、長崎の情報を世間に知られたら、「そんな爆弾作るのがめんどい。」と言われるのを恐れたため、広島、長崎のことを秘密にしたそうです。しかも日本は、戦時中でどうやって戦争に勝つかなどのことしか考えていなく被爆者が苦しんでいるのに支援などもしなかったそうです。アメリカはもちろん、日本も被爆した国民をほったらかしにしたことは、ひどい国だと思いました。

3つ目は、被害の大きさです。僕は今まで被害の大きさは、爆心地がある広島市だけだと思っていましたが実際は広島県内の多くの市が被害にあっていたそうです。しかも原爆から出た熱線は、爆心地の真下で約3000度から4000度だったそうで、それだけ強力な原爆だったということがわかりました。被害がどれだけ大きかったか、この話だけでわかります。

当時は、原爆により破壊された建物はたくさんあり、たくなさんの人が苦しんだということを知り、このようなことが2度と起きてはいけないと思いました。広島が当時どれだけのものと人を失ったか、地獄のようになったかということを忘れてはいけないと思います。

自分には関係ないという考え方をしないで、自分に何かできることはないかなと自分にできることを考えてみました。その中でもまず、広島に原爆が投下されて起こったことを友達や親戚などいろんな人に広めることをしてみたいと思います。戦争を実際に経験した人は高齢で亡くなっていく人が多いそうです。その人たちの代わりに僕たちが戦争がどれだけ残こくなことなのか、平和の大切さを伝えていく必要があると思います。そして、平和の大切さを世界中に広め、世界のどこでも争いごとが起きないという世界を目指しましょう。

平和広島派遣団に参加して

北中学校 1年

私は、平和広島派遣団に参加して、感じたことが、2つあります。

まず、1つ目は、原子爆弾を落としたのは外国なのに、国境の無い世界地図があり、この世界が1つになるという意味があるからです。さらに、原子爆弾を実際に体験をした方の話を聞くと、外国の人は全く恨んでいないということでした。私はそれが一番おどろいたことでした。私は、原子爆弾を落とされた広島と長崎の人は外国の人を恨んでいるのかなと思ったけれど、恨んでなくて、その原子爆弾を実際に体験した人の話を聞くと、こう言いました。

「今、恨んだりしても意味がない」

と。私は、この言葉を聞いた時に確かにそうだなと思いました。今、私達が出来るとは恨むことではなく、たくさんの支えんをするということなのだとということを気付かされました。

次に、2つ目は、今、私たちと同世代の広島の子供達も原子爆弾について、よく考えているということです。平和への誓いという文が毎年広島市の小学校6年生の子達が書いています。それには、小学6年生が考えたとは思えないようなことが書かれていました。

「自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。」

「本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとすることです。」

平和の誓いの文章の初めも、私はおどろくような事が書かれているなとは思いましたが、これが本当の事だと思いました。私たちと同じ歳なのにすごくこまかく書かれていて、私はとても感動しました。

私は、これから、「平和」という事に対して、今、起きている事を重くうけとめ、未来が、明るい未来になればいいなと思っています。だから、私は、この広島と長崎に原子爆弾が落とされたのと同じようなことが、日本、世界で、二度と起こらない国を作っていきたいです。

私は、広島派遣団に参加して、学び、そしてこれからどうしていきたいのかを考えるようになりました。

今回学んだことは、核兵器の恐ろしさ、戦争の恐ろしさです。私は、原爆ドーム、平和記念公園、平和記念資料館を見学しました。

原爆ドームでは、核兵器でぼろぼろになった姿を見ました。私は、たった1つの原子爆弾で、こんな風になってしまうのかと核兵器の恐ろしさを改めて思いました。

平和記念資料館では、私たちと同じ中学生が身につけていたものや、当時の方々の写真や絵などがありました。核兵器は、関係ない人や、幼い子も被害を受けてしまうものだと思いました。

平和記念公園では、お墓など色々なものが建てられてました。その中でも、私が印象に残ったのは、平和の灯というものです。平和の灯というのは、1964年8月1日から火がついていて、この火は雨やあらしでもきえません。この火がきえるのは、世界からすべての核兵器がなくなった時だけです。現在でもこの火はまだついています。私はこの火が一刻も早くきえることを願っています。

そして、最後に被爆された方の話を聞きました。核兵器が落とされ、たくさんの方が、やけどをおったり、亡くなったりしたのをきいて、二度と核兵器を使ってはならないことが分かりました。

これらの事を通して核兵器を二度とつかってはいけない。世界から核兵器をなくしたい。そして、今ある日常は当たり前ではないことをたくさんの人に広めたいです。



「雲一つない明るい朝、死が空から降り落ち、世界は変わった。閃光と炎の壁は都市を破壊し、人類が自らを破壊するすべを手に入れたことを実証した。」

これは2016年にオバマ元大統領がアメリカの現職の大統領として初めて日本へ来日し広島の平和公園を訪れた際のスピーチの冒頭です。私はこのスピーチに戦争に対し強い思いを感じるため強く印象に残っている私の好きなスピーチです。

私が初めこの広島派遣に参加しようと思ったきっかけは自分の曾祖母から戦争の話を聞いていたためです。私の曾祖母は戦時、現在の豊田市浄水町の方に暮らしていたようで、浄水に飛行場があってそこへアメリカの航空機が爆弾を落として帰っていったのを見て怖かったということをとて詳しく鮮明に話してくれました。私は忘れられないほど怖い出来事が身近な人にも起こっているのかと思い、戦争でどれだけ恐ろしいことが行われたのか興味を持つようになりこの広島派遣団に参加を希望しました。

私は世界で初めて落とされた広島に着いて、少し疑問を持ちました。今の広島は原爆が落とされた街とは思えないくらい、新幹線に乗る前と同じような発展した街並みが広がっていたからです。こんな草木が生え、ビルも立っている場所に、本当に原爆が落とされたのかと思いました。しかしその思いはホテルにつく前に消えました。そこには原爆ドームがありました。原爆ドームを見てここには本当に原爆が落とされ多くの人が亡くなったのだと改めて思いました。

私が一番印象残っていることは、平和記念資料館のことです。資料館にはサミットの効果もあってか外国の方も多くいました。そしてあの資料館は当時の様子を表したもので埋め尽くされていました。入ってすぐ見たのは当時の焼け野原となった広島の写真でした。比喻でもなく全てのものが崩れて遠くまで見渡せる今の広島とは考えられない光景でした。先に進めば進むほど頭から血が流れている女の子の写真や言い表せないようなグロテスクでとても恐怖を感じる展示品が多くありました。進むごとに見学の列が混んでいき展示物を長い間見つめ、深刻な表情をしている人が多くなっていくように思いました。その展示物一つ一つから自分たちに二度とこんなことを起こさないでくれと訴えられたように感じました。この資料館は全世界の人々へ戦争の恐ろしさ、命の尊さ、平和の偉大さを伝えるためにこれからも残していきたいと思いました。

平和記念資料館を後にし、実際に被爆された方の話を聞きました。

B29がやってきて空襲警報が鳴ったがその戦闘機が一度、広島の街を過ぎ去っていった。人々は警報が解除されいつもの生活に戻ろうとしているとき、広島の街の600メートル上空で原子爆弾は爆発した。その爆発は地上でも温度が3000度を越え秒速280kmというとても強い爆風を放った。鉄の融点は約1500度鉄でさえも簡単に溶かす光と爆風によって広島の街は包まれた。

なんの情報もないため原子爆弾のことをピカドンと呼び放射線を毒ガスだと言っていた。街の外へ逃げていた人も街に帰ってきて放射線に侵されてしまい病気になってしまった。戦争が終わってもGHQによる情報規制によって助けてくれる人もいない。物資がないから助かる命も助からない。

私はこの方の一時間半にも及ぶ話から強く熱い思いを感じました。

「この美しい悲劇を決して忘れないように。」

皆が二度とこのような悲劇が起こらないよう努力しますように。

愛と平和の祈りを込めて」ペティ・ウィリアムズ

今回学んだ広島が発信し続ける平和について、できるだけ多くの人に伝えることを願っています。

中学生平和学習広島派遣に参加してみて

南中学校 1年

今の日本は、平和です。僕が見る限りではそう思います。しかし、それは「今」の話です。「昔」はどうだったのでしょうか。平和学習広島派遣に参加し、僕はそれについて考えることができました。

今回の派遣で、僕たちは広島へ行きました。もみじまんじゅう、牡蠣、レモンなどの特産品。世界遺産にも登録されている厳島神社などの建物。そこはまるで、楽園のように美しかったです。派遣のメンバー達は、厳島神社でお参りをし、楽しんでいる様子でした。僕もそんな仲間達を見て、楽しいなあ、平和だなあと感じました。

しかし、昔は違います。もっと悲惨で、耳を傾けられないような話があります。

1945年 8月6日 午前8時15分

その瞬間、近くが眩い光に包まれました。木々が失われ、尊い命も奪われます。広島に原爆が投下されました。爆心地の中心近くは3000℃。原爆で亡くなった方は、総勢で14万人。当時の様子を、語り部の“清水 弘土”さんは語ります。朝なのに空は暗いです。なぜなら、原爆の衝撃によって様々なものが粉々になり、空に舞い上がったからです。そして、たくさんのものが燃え、まるで地獄のようでした。これだけでは終わりません。たくさんの方が死にました。清水さんは当時庭で遊んでいて、庭から家に入ろうとした瞬間に被爆してしまったそうです。この悲惨な話を聞き、命は失ったらもう二度と戻らない尊いものなのに、その事が分からない者達に、理不尽にも命が奪われてしまったのは胸が締め付けられました。

原爆がもたらす影響はこれだけではありません。もっともっと恐ろしいものがあります。「原爆症」です。原爆が爆発したとき、2種の放射線が放射されます。ガンマ線と中性子線です。中性子が他の物質に当たると、さらに他の放射線も発射されます。なので、この二つの線によって原爆症は引き起こされます。

原爆症の恐ろしい所は3つあります。1つ目は“激しい”下痢です。引き起こされる原因は、腸の表面にある、食物の栄養を吸収する粘膜が放射線によって破壊され、食物が噛まれただけの状態で排泄されてしまうからです。2つ目は“吐血”です。引き起こされる原因は、血液中にある白血球が極端に多い、または少ないから、ということの他に、血を止める作用がある血小板の生成をしている骨髓が、放射線により過剰のエネルギーを与えられて壊れてしまう、というのが主な理由です。3つ目は“すぐに分からない場合がある”です。ある人は、小さい頃に被爆し原爆症を患いましたが、中学生頃に急に元気を取り戻し、スポーツが趣味になるほどでした。しかし50代頃になると、腎臓病や脊髄の病気を発症するなど、時間がたって後遺症が発現しました。

このような3つの理由から、原爆症は原爆が恐れられる理由だと分かります。まだまだ原爆症に苦しんでいる人がいる、という事実もあるので、それを聞くととても悲しくなりました。

原爆の影響は大きいものでしたが、県の知事などの意思により、広島の復興が始まりました。しかし、他の県からの支援は全くありませんでした。なぜなら、GHQの影響があったからです。GHQとは、当時日本を占領していた連合軍達のことです。具体的にどんな影響を与えたかという広島と長崎の原爆に関する事を報道するのを禁止しました。これにより、他の県は広島と長崎の悲惨な状況を知ることができず、他の県などから支援は届きませんでした。

しかし、広島の人々は諦めませんでした。国に何度も何度も話をし、ついに、原爆の被害に関する補助を提供する法律ができました。そうして、今の平和な広島があります。しかし、原爆の後遺症で苦しんでいる人はまだまだいます。歴史に悲惨な状況は残っています。今も、9か国が原爆を所持しています。悲惨な過去は忘れずに伝え続け、これからの世界に二度とこんな事は起こらないようにしよう。という気持ちを、僕たち若い世代が大切に、友達や家族にこの悲惨な状況を伝えるなど、身近から出来る平和に関する行動をしていきたいです。

私は広島派遣団に参加して、初めて広島に行きました。二日目の最初は、平和記念公園をガイドの方に案内してもらいました。韓国人原爆犠牲者慰霊碑や原爆共養塔、動員学徒慰霊塔を見て、本当にたくさんの方が亡くなったこと、平和の鐘や平和の時計塔などには、たくさんの平和への思いが込められていることを知りました。

広島平和記念資料館では、初めの方に被爆者の遺品が並べて展示してありました。服や、かばんや、弁当箱がとてもしろしろになっていました。周りを見ると、しゃべっている人はいなく、全ての人が展示品をじっくり見ていました。「魂の叫び」という場所では被爆者の遺品一つ一つに、そのときの状況、残された家族の思いなど説明が書いてありました。そこには、帰ってきた兄の、腫れた足から靴を脱がせた妹の気持ちや、娘を2人とも亡くした母親の気持ちが小さな字で書かれていました。私はこれらを見て涙が出てきました。初めに見た、たくさんの遺品も、誰がどんな思いでこの資料館に寄贈したかを考えると涙が止まらなくなりました。このようなことは二度と繰り返してはいけないということを改めて理解し、心から思いました。

資料館を出た後は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館へ歩いて行き、被爆体験講話を受講しました。講師の清水弘士さんは、3歳の時、爆心地から1.6 km離れた自宅で、母と遊んでいた庭から家の中に入った瞬間に被爆したそうです。朝なのに暗かったことや、爆心地の方からたくさんの方がゆっくり歩いてきていたことなどそのときの状況をとて詳しく教えていただきました。建物も、崩れて燃えて、火の海の底にいるようだったと話していました。また放射線、後遺症の怖さや、被爆者が戦後10年間ほったらかしにされたということについても知りました。戦争に勝ったアメリカは、日本を占領し、原爆のことを隠そうとしたため、誰も被爆者を助けず、その間に何万人もの人が亡くなったそうです。そして、私が1番怖いと感じたのは、この話は昔話ではありませんと言われたときです。実際、ロシアは今、核兵器を使う準備をしています。そしてもし、ロシアが使えばアメリカも使い、核戦争になり、世界も終わりだと言っていました。私はこの話を聞いてとて怖くなりました。78年前の原爆よりもっと強いものがたくさん使われるなんて考えたくもありません。こんなことが絶対に起こらないように、戦争や原爆の怖さ、平和の大切さをたくさんの人に伝えていくのが、私の使命だと感じました。

私の曾祖父は被爆者です。爆心地から約4 km離れた三菱造船所で33歳のときに被爆したそうです。だから、曾祖父がそのときもう少し爆心地の近くにいて亡くなっていたなら、私は今ここにいません。そう考えるととて恐ろしくなってきます。またあのとき原爆が落ちていなければ、どれだけの人が生きていたでしょうか。今回の派遣は命と平和について考える良いきっかけになりました。今の幸せなこの暮らしは、過去の悲惨な出来事を乗り越えてきたからこそあるものであり、当たり前のことではないということが分かりました。それと同時に戦争や原爆がどれだけ悲惨だったかも知りました。この2つは、これから生きる人たちに伝えていかなければいけないことです。まずは、たくさんの人に、平和について考えてみてほしいです。そのきっかけになるのが私の役目です。今回学んだことを、友達や学校など周りの人へ伝え、戦争や原爆の悲惨について理解してもらい、平和への第1歩につなげたいです。

僕は今回、みよし市中学生平和学習広島派遣団の一員として初めて広島に行きました。実際に参加する前は、これまで行ったことがない広島に行ってみたいという程度の軽い気持ちで、遠い昔に起こった戦争について深く考えたことはありませんでした。しかし、この二日間の派遣を通して、戦争の生々しさ、恐ろしさを実際に見聞きして、そんな軽い気持ちはすぐに消えてしまいました。

一日目の朝、市役所に集合し、バスで名古屋駅まで移動して、新幹線で広島に向かいました。広島に到着後、宮島へ行きました。そこで厳島神社などを見学し、派遣団のみんなと一緒に行動する中で、少しずつ話ができるようになりました。他の中学校から参加している人達とは結団式で一回会っただけだったので仲良くできるか不安でしたが、ここで話ができるようになったのでほっとしました。他の派遣団員と少し仲良くなることができ、一日目を終えるまでは、僕はとても楽しい旅になると想像していました。

しかし二日目、実際に原爆ドームを見た瞬間、これは酷いととても驚きました。建物はかつての原型をкаろうじて残していましたが、鉄骨がむき出しになり、レンガはボロボロになっていました。その後、原爆資料館を見学しました。髪が抜け落ちてしまった女性の写真や高熱で変形した三輪車、被爆者が描いた絵などがたくさん展示されていて、それらを見たとき、目を背けたくなり、寒気がして鳥肌が立ちました。原爆被害の悲惨さが心に突き刺さり、涙が出そうになりました。

見学後、被体験者の清水さんのお話を聞きました。清水さんは爆心地から1.6キロほど離れた自宅で被爆したそうです。清水さんは戦争に至った経緯や原爆の怖さをとても熱く語ってくださいました。清水さんのお話の中で、「いつまでも暗い気持ちでふさぎ



込んではいけなない。自分達は原爆被害が実際にどれほど悲惨であったのかを知っているからこそ、少しでも多くの人達にそのことを伝えておかねければならない。」という言葉が印象に残りました。清水さんが強い使命感を持たれていることを感じ、お聞きした話を僕達が次の時代に語り継いでいかなければならないと思いました。

今も世界では、いろいろなところで戦争や紛争が起こっています。ロシアとウクライナの戦争、南スーダンでの紛争、北朝鮮による核弾道ミサイルの打ち上げなどにより、いつ核兵器による悲劇が再び引き起こされるかわかりません。それらをニュースや新聞で見ても、以前の僕のように、自分には関係ないと全く気にせず、興味や関心を持たない人がたくさんいると思います。そのような人達に向け、僕たちが今回の派遣を通して学習し、感じ取ったことを話し、広めていきたいです。一人でも多くの人達に伝え、平和について考えてもらうことで、世界平和へ一歩ずつでも近づく助けになればと思います。

私は、みよし市中学生平和学習広島派遣に参加しました。本や教科書からはわからない事を、自分の目で、実際に体験したかったからです。

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分に、アメリカ軍が日本の広島に対して投下した原子爆弾。この原子爆弾により、およそ、14万人が亡くなっていて、被害者は、およそ30万人で、みよし市の人口の約5倍が原子爆弾による被害を受けています。原子爆弾は、通常兵器とは違い、爆発した瞬間に、強烈な熱線と放射線が四方へ放出されます。また、熱により周りの空気が大きく膨らみ、爆風となって広がりました。これらの三つが複雑に作用したこと、放射線による障害がその後も長期的にわたり人々を苦しめたことが、とても大きな被害をもたらした原因だと私は思っています。

また、爆風によって破壊された建物のガラスや建築材料が身体に突き刺さって重傷を負う人や、人間自体が吹き飛ばされて、建物などに叩き付けられて死亡する人、倒れてきた建物や柱の下敷きになる人や、爆発したときの熱で焼け死んだ人がたくさんいました。爆発0.2秒後から3秒後までの間、爆心地周辺の温度は3000度から4000度にまで達しました。この温度を聞いてもピンとくる人はいないと思いますが、鉄が溶ける温度が約1500度、人間が溶ける温度は約1600度です。

そして、特に厄介なものは、放射線による被害です。原爆が爆発して1分以内に初期放射線が大量に放出され、さらにその後も、残留放射線が地上に残りました。このため、直接被爆しなかった人でも、救援・救護活動や家族などを探すために爆心地付近へ行き、放射線を受け、それが原因となり病気になったり亡くなったりする人がでたそうです。

平和記念資料館では、戦時中や戦後にどんな暮らしをしていたのか、実際に見てきました。原爆が落とされ一瞬で建物が崩れていく様子や、崩れたその後の様子が壁に映しだされていて、あっという間に無くなってしまうのを見て驚きました。他にも人影が焼き付いたコンクリートや、ぼろぼろな服、溶けてさび付いた三輪車、熱でくっついてしまった食器の塊をみて原爆の激しさと恐ろしさを目の当たりにしました。

見学を終えた後は、被爆者の方からお話を聞ける貴重な機会をいただきました。遠くからガラガラ音がきこえ、ドンと腹にくる音がなるとおっしゃっていて、想像するだけでも怖いのです。砂やほこり、黒煙など全部がまい上がり、太陽をさえぎって、朝なのに暗い現象が起きたそうです。被爆時にあびた放射線で細胞が崩れ血液がおかしく鼻血などの出血は珍しくなかったそうです。体はだんだん元気になりましたが、年をとると次々病気が発症し、不自由な生活を今でも送っています。「被爆者は死ぬまで戦争」と被爆体験者の方は仰っていました。私はそれを聞いて、原子爆弾はそのときだけではなく、落ち着いてきた今でもずっと続くという事に気づきました。

被爆から78年が経った今、被爆者の方々のお話を聞く機会が減ってきています。これからの平和な世の中をつくっていくのは私達です。まずは原爆がどれほどの威力を持っているのか、どれほどの人を長年苦しめ辛い思いをさせてきたのか、少しでも多くの人に知ってもらい、これから先、たくさんの人に語りつないでいきます。このようなことが二度とないよう、一人一人が夢や希望を持ち、世界中のみんなが仲良く一つになった平和な世の中が来ると信じて。

笑顔で世界中が溢れますように。

広島と平和を知る

三好丘中学校 1年

皆さんは広島街に行った事がありますか。きれいな川が流れ、繁盛していてとても良い街です。しかし、そんな広島にも悲惨な過去がある事を皆さんもご存じだと思います。

1945年8月6日午前8時15分広島市の晴れたきれいな空に三機の戦闘機が来て、一発の原子爆弾を投下しました。その瞬間太陽よりも1000℃高い7000℃もの熱が広島を襲い、熱さから水を求め多くの人々が川に飛び込みました。しかし、その時間帯の川は海水で飛び込んでしまった方々は亡くなってしまいました。それらも相まって14万人の方が亡くなりました。14万人の半分にも上る約7万人の方が身元が分からず、自分の家のお墓に帰れていません。身元不明者のお墓には、今も欠かさず花が供えられています。

平和記念公園には平和の灯というものがあり、平和の灯とは、この世界から核兵器が全てなくなるまで灯が燃え続けるというものです。その灯は何だか悲しいように見えました。いつか、この灯が消えてくれることを望みます。その日には必ず立ち会えるようにしたいと思います。

負の世界遺産ともいわれている唯一の被爆国の平和の象徴である原爆ドーム。骨組みがよく見え、少し残ったコンクリートで構成されています。この姿はどこか悲しくもみえるし、堂々とも見えます。これも一種の遺品と言えます。ではなぜこれが残されているのか。僕は、もう二度と同じ過ちを繰り返さないためだと思います。

平和祈念資料館では原爆の恐ろしさ、遺物、実際の写真などがあり、かなり生々しかったです。中でも一番印象に残ったのは人影の石です。銀行の前にある石段に腰を掛けていた人が被爆により影だけが残ってしまったというものです。他にも学生たちの制服や弁当、自転車などの遺品一つ一つに悲しいストーリーがあります。そして平和に関して僕たちに何か訴えてきている様な気がしました。

被爆体験者の講話ではより一層息が詰まるような話を聞きました。原爆には後遺症を残すという危険性もあり、10年間もの間苦しめられたそうです。何も罪を犯していないのにこんな苦痛を味わうなんて、戦争はやはり間違っていると強く思いました。

アメリカは原爆の投下後、周りに情報が流れないように「プレスコード」を行い、日本のメディアを6年半の間規制しました。だから、支援がなくて救える命も失われていきました。ですが、あきらめず広島市民全員が協力をして、広島街を復興させました。前に進もうとした意思の成果だと僕は思います。

僕は、広島で当たり前の大切さを知りました。僕たちが何気なく安心して暮らせたりご飯を食べたり出来るのはとても幸せな事なのだと気付かされました。当時の広島市の人々は、次にいつ空襲が来るかわからず怯え、十分にご飯を食べることも出来ませんでした。過去の過ちから学び、僕らは平和に暮らしています。当たり前というものは何気ないですが、過去の歴史のおかげで成り立っているということを改めて理解させてくれました。

僕は、この派遣を通して戦争の残酷さをより一層理解することが出来ました。戦争は未来も人も時間もうばってしまいます。死んでしまったら何もできないのに戦争は今もなくなりません。こんなことを繰り返さないために原爆ドームなどが残っているのに無駄にしてはいけないと思いました。僕たちに出来る事とは何でしょう。僕は募金をする事だと思いました。その募金を原爆ドームの維持に使ってほしいです。維持することによってこの悲しい出来事を未来に伝えていくことが出来ると思うからです。皆さんは平和の為にどのような事をしようと思いますか。ぜひ、平和について考えてみてください。

私は、たった一発の原爆が明るい未来や大切な人を失ってしまうということを、広島派遣団に参加して学びました。

1日目、広島に着いたとき、原爆が落ちたとは思えないほど建物が並び、多くの人々や車が行きかっていることに驚きました。その後、船で宮島に行きました。一度の船に乗る人数が多く、宮島はたくさんの人でにぎわっていました。世界文化遺産である厳島神社の大鳥居は、自然の重みだけで立ち、とても迫力がありました。

2日目、平和記念公園では、様々な建物や慰霊碑、塔がありました。「平和の鐘」は、核兵器と戦争のない平和な世界を目指して、鐘の表面には国境のない世界地図が描かれています。私は、この鐘を通して、広島から世界に平和を伝えていきたいと思いました。「平和の時計塔」は、毎日、世界で初めて原爆が落とされた時間である「8時15分」にこの時計塔のチャイムが鳴ります。そのチャイムが全世界に届くようにと、球体に3つの時計が3方向を向いてついています。2日目の朝、宿の外に出て、このチャイムを聞いたとき、私たちにとっては新鮮なものでしたが、広島はこの地域に住む人々にとっては、身近なものだと知りました。「平和の灯」は、世界から核兵器がなくなるまで燃え続けるそうです。今日この日も燃え続ける灯が核兵器の存在を強く表していると思いました。平和記念資料館では、たくさんの写真や絵、実際に被爆した物などがありました。中には、火傷や斑点のある人の写真があり、目を向け続けることができませんでした。他にも、ぼろぼろになった服や三輪車、弁当箱、眼鏡など、数多くの物があり、胸が痛くなりました。また、原爆投下前後の違いが分かるように、広島産業奨励館と原爆ドームの模型や、通常のもので大火災の高熱によって変形したガラス瓶など、比べて触ったりすることのできる展示もありました。外国の方々も多く訪れ、興味を持って見学している姿が見られました。被爆者の方の話では、直接体験した方だからこそ感じられる戦争の怖さというのがありました。当時3歳であった被爆者は、母親と遊んでいた庭から家の中に入ったときに被爆をしたそうです。被爆者は母親に守られたため無傷で済みましたが、母親は血を流していたそうです。原爆投下後の後遺症はたくさんの人を苦しめたにもかかわらず、被爆者は戦後10年間ほったらかしにされ、助かる命も助けられなかったと言っていました。原爆で無差別に亡くなった人がいるのに、より多くの死者を出していてとても悲しく、不思議に思いました。それは、8月15日の終戦以降は組織的な救援活動がなくなってしまい、被爆者に対する救済金は出なかったためだそうです。

戦争は二度と起きてはいけません。私たちは、被爆者から直接話を聞き、受け継げる最後の世代であるからこそ、悲惨な過去を忘れられないように、私たちが自ら発信し、伝えていくことが大切です。今なお世界の核兵器は12000発を超え、9カ国が保有しています。「平和の灯」が消える日が一日も早く来るように、世界から核兵器がなくなってほしいです。今回、この広島派遣団に参加させていただき、今当たり前のように学校に通っているけれど、78年前の子供たちは学校に通うことができなかったことを知り、学校に行けること、友達と笑いあえること、周りの人が支えてくれることに感謝して、私たちは生活していく必要があると深く思いました。

広島の過去から学び、今、すべきこと

三好丘中学校 2年

私は、自分の目で原爆が引き起こしたことを見て、自分の耳で被爆者の方の話を聞くために広島派遣に参加し、初めて広島に行きました。

1日目、広島に到着して、まず驚いたことは、原爆で75年間草木が生えないと言われた広島が、78年経った現在、日本の他の地域と同じように緑が生い茂っていたことです。ただ、私達はこれを受けて75年間はあげさだったわけではけっしてなく、広島の人達の努力で、ここまで緑が戻ってきたと理解することが大切だと思いました。

2日目に行った平和記念公園には、原爆で被害にあった方々への想いが、多くに散りばめられていました。それは、日本だけではなく、海外の被害にあった方々にも、向けられていました。このことから、日本の広島・長崎のみが、被害にあったのではなく、世界にも、被害を及ぼしたのだということが、分かりました。

平和記念資料館で、自分の目で、原爆の悲惨さを見ました。被爆時の衣服とともに、被爆者の望みが書かれている展示が、ありました。望みの1つ1つが重く、痛みや、苦しみを感ぜさせる必死の叫びのように、思いました。原爆投下後、

「桃を食べたい」

「水をください」

心の底から望んだけれど、当時の状況では、叶えるのが難しいものばかりで、望みが、望みで終わってしまっているのが、とてもむなしかったです。

最後に、被爆体験講話を受講し、3歳の時に、爆心地から1.6km離れた自宅の中で、被爆した清水さんの話を伺いました。清水さんは清水さんの家族の話、原爆後遺症、被爆者の原爆後についてを、話して下さいました。清水さんの話で、特に強く印象に残っているのは、戦後約10年間被爆者はほったらかしにされていたとおっしゃったことです。なぜ、そのようなことが起こったのかというと、戦後日本を占領した、GHQによる、プレスコードが出されたからです。プレスコードによって、広島・長崎のことを報道したり、書いたりすると、出版停止や、逮捕されるため、報道されず、広島・長崎の現状を、日本人の誰も知ることができませんでした。その結果、大量の血液や、栄養があれば、助かるはずであった命さえも、助けられなかったのです。反面、今を生きている私達は、原爆のおそろしさを知っている点では、戦後当時の人たちより、多くの情報を得られているのではないのでしょうか。

3732発。これは、2022年時点での、実戦配備されている、核弾頭の数です。現在は、3800発程に増えているそうですが、実戦配備とは、ボタンを押したらすぐに、発射できる状態の核弾頭を指しています。つまり、原爆は過去のことではなく、今なお、身近にあり続けているのです。

そして、今、ウクライナとロシアで、戦争が起こっています。原爆に限らず、戦争は、人を苦しめますし、もし、どこかの国が核兵器を使用したら、世界中は核戦争となり、昔あった悲劇が引き起こされます。なぜなら、実戦配備されている核弾頭が3800発も存在しているからです。もう2度と、原爆を落として、悲しむ人がいなくなるようにするために核を失くしていかなければいけないと、広島派遣を通して、自分の目で見て、耳で聞き、より、強く思いました。

僕は、この派遣に行く前は正直、平和について考えていませんでした。ですが、派遣をきっかけに、ロシアのウクライナ侵攻について考えました。その状況を見て平和は簡単に壊されてしまうんだと思いました。

派遣に行き、原爆ドームなどを見てきました。原爆ドームは鉄骨などもむき出しになり当時の事を物語っていました。とても生々しかったです。当時は本当に原爆ドームと少しの建物しか残っておらず、焼け野原になってしまいました。原爆ドームが残っていたのは爆心地に近く、上からの圧力の方が大きかったからです。ですが原爆は爆発したときに約三千度から四千度ほどの温度になりました。太陽の表面温度が約六千度です。この温度は鉄を溶かすほどの温度です。水分は蒸発し、人間の皮膚は溶けて、ケロイドと呼ばれる状態になりました。その人達は水も求めます。近くの川に飛び込みます。ですが助かりません。それは、広島川の潮が満ちると海水になってしまい、真水じゃなくなるからです。そして、1945年8月6日午前8時15分のこの時間は潮が満ちていました。そして海水に入り、たくさんの方がショック死をしてしまいました。そして、この原爆の死者は、約三十万人にもなりました。ですが、生き残っていた人もいます。実際に被爆をした方にお話を聞きました。これは戦争の事になるのですが、うさぎをみんなが飼っていたとききました。このうさぎは兵士の服や食料になりました。当時の日本人は戦争に反対している人が少なく、みんなが戦争の手助けをしている状態でした。原爆が落とされ、爆発します。とても高くまで、煙が立ち空を覆いました。空は朝も昼もなくずっと夜でした。爆発のときには、とても速い熱風が吹きます。衝撃波がでるため風が吹き、家をなぎ倒します。一・六キロメートル離れていても飛んでくるほどの威力でした。その当時の人達は原爆を知らないから、空襲のときのように次の爆弾に備えていました。ですが、原爆は核原子を使っているため、放射線がでて人体に影響を与えました。まず、外から細胞を壊します。ほこりなどと一緒に飲みこんだと思われる放射線が中から内臓を壊しました。例えば腸です。腸の粘膜が無くなり、その代わりに潰瘍ができてしまいます。ご飯も食べれなくなってしまいます。他にも大量の鼻血が出るようになる人もいました。それは放射線の影響で異常な血液が作られたからです。その原因は骨髓や幹細胞がおかしくなったことです。血液の成分が正しく作られず必要なものが欠如して血を固めることができなくなるからです。ですが当時はGHQにより報道が禁止されてしまい、助けが来ることはありませんでした。さらに日本も戦争を優先し、被爆者への救済金は払われませんでした。しかも被爆者への医療法も被爆から12年後に作られるなど対応が遅れていました。

このような事を聞いたり、見たりして、平和はやはり、簡単に壊されてしまうと思いました。自分は平和を大切にしなければならぬと思いました。その一歩として、原爆を無くさなくてはならないと思います。原爆のことをよりたくさんの人に伝え次の世代、次の世代へと繋げていけるようにしたいです。

さらに、今僕が気になっているのは原子力発電所についてです。発電所では、原子力が良いエネルギーとなります。ですが兵器になれば、悪いエネルギーとなります。その事をふまえて原子力発電所で事故があれば、周囲に影響があります。万が一、テロリストなどが原子力発電所を狙えば、一大事です。こういうことが起きないように、システムの管理や、リスクの大きい原子力を使うことの検討が必要だと思ったので、原子力発電所についても考えていきたいと思いました。



令和5（2023）年度みよし市中学生平和学習広島派遣団